ソール・ベロー：文学性の形成

―伝記資料を中心に―

池　田　肇　子

昨年６月筆者は，ソール・ベロー論文集を上梓した。その後身内の不幸などもあり，種々の雑事に追われてベロー研究からは遠ざかる日々が続いていた。そんな折に，今回の面映ゆいばかりの企画のお話を頂いたのである。既に，持てるアイディアは，先の論文集に出し尽くした感があるので，次の作品・テーマに着手するには時間的余裕もなく弱り果ててしまった。

とは言え，強いてベロー関連で挙げるとすれば，中途半端ながら目を通していたのが，本作家の書簡集と他研究者による伝記であったことから，これらの文献を通読して何らかの知見―ベローの文学的特性の成り立ち―でも得られるかも知れない，と晩秋の頃にようやく方向が定まったのであった。[1] 結果として，極めて重い読後感に浸ることになり，単なる個人的印象で終わる訳にはいかない行き止りの袋小路に迷ったことになった。不消化は承知のうえで，気付いた点を列挙して，総体的な特性を抽出することができれば望外の幸せである。

１．登場人物の創造

ベローの執筆時の周辺の事情は，作品を取り上げる度に多少の情報として考慮してきたが，前述の文献によるとフィクションと言うものの実際はかなりの程度で事実に即した内容になっていることが判明した。友人の間では，

登場人物に描かれている各自の身体的・性格的特徴を認識して，憤慨する者をあれば，取り上げられたことを喜んで面白がっている者もいたようだ。勿論そっくりそのままと言うのではなくカリカチュア化されて個性が際立っている，という創意が施されるのである。そこでは，当然作家の恣意が働いているから，好意的に描かれたり，あるいは，悪意をもって誇張・矮小化されたりする。

例えば，『オーギー・マーチの冒険』［*The Adventures of Augie March*］（1953）に登場する人々は，母親，兄弟，間借り人の老婆，最初の人生教師と目される車椅子のアインホーンなど強烈な個性の人物が生き生きと描かれて，みなそれぞれの人生と格闘している，否，それなりに謳歌しているのである。主人公が少年から青年に至る過程における人生の出来事は，少年の無垢な視点から観察され行動されるがゆえに，登場する大人たちは殆どが異様な姿をみせ奇怪な行動をする。しかし，作家は，理解の届かない少年のふりをしながら世の中の矛盾，可笑しさを自由闊達に喝破しているとも言える。なかでも，母親は，間借り人のローシュ婆さんにすっかり牛耳られているようだが，実は，この婆さん，優しいばかりの母が息子 3 人の母子家庭を切り盛りする際に，カリスマ性を発揮して支えているのだ。また，玉突き場を経営しているアインホーンは, 妻に車椅子を押してもらう身であるものの, オーギーにとってマキャベリ的強い父性の指導的役割を果たして世の中の諸相を見せてくれる。

伝記によれば，ベローの父親アブラハムは，ロシア，ペテルスブルグからの移民ユダヤ人で，輸入業などでかなり裕福な暮らしをしていたが，1912年書類の不備により罪に問われたためカナダの親戚を頼って国外脱出した。上陸したハリファックス港で担当の移民局員により Belo 一家は西欧風の Bellow と改姓された。末子ソールは，1915年カナダ，モントリオール郊外で誕生した。ソール 9 才の時，カナダでの生活に見切りをつけて，一家はシカゴのユダヤ人居住地区に移動。この時アブラハム以外は不法にアメリカに入国していたので，ソールは作家として名声を得た後に，正規に入国手続き

をしたとある。

『オーギー・マーチの冒険』では父親不在の家庭が描かれていた。作家は，ここで父を亡きものとしているわけだが，実父アブラハムは1955年に死亡するまで，上の二人の兄と違って実業家としてではなく（軟弱な）作家で身を立てようとしている末息子を不甲斐ないと思っていた。一向に稼げないで兄たちに援助を受けているのを見ていた父は，情けないと思うのか大人になってもソールを殴り，金の無心に来たときなど息子をピストルで脅してまでして追い帰したのだ。このような扱いをされていた作家は，小説のなかで父親不在としてその存在を抹殺していたと言えよう。ところで，アブラハムは，53年の本作で全米図書賞（National Book Award 1950年創設）を受賞し，一躍有名になった息子を見届けたかのように病死する。常日頃，遺産は渡せないとソールの生き方を強硬に認めようとしなかったにも拘わらず，実際はソールにも残していたという旧世界の伝統を守る典型的ユダヤの父親であった。

２．青春期の友情

母ライザは，ソール17才の時に乳がんで亡くなる。アブラハムは，息子たちに勉学などに時間・金を使わず，すぐに経済的に自立することを望んだ。片やライザは，子どもたちに勉学，教養に触れさせることを主張した。厳しい経済状態のなかで姉ジェーンには，ピアノを，ソールにはバイオリンを習わせている。社会思想や哲学などに夢中になって一向に実業へ進まない末子に，実家の祖父の職業であるユダヤ教の聖職者，ラビを目指すという夢を託していたのだ。移民一家は，移動する先々でその地の言語を習得して生き延びる。ベロー家ではカナダでの英語，フランス語に加え，アメリカでは米語を，そしてユダヤ人家庭でのヘブライ語，イディシュ語と多言語が話されていた。その間母だけは，英・仏語を習得することなく移住先での孤立化を深めていたようだ。また，家庭ではユダヤの戒律に基づいた料理を供し，子供

たちはヘブライ語，トーラー（律法），音楽を学ぶことを主張した。

一方ソールは，母という精神的支柱を失い，１年後には再婚した頑強な父から逃れるため早々に家を出て下宿する。家庭の味は，ハイスクール時代からの友人たちの家で，寂しさはこれら友人たちと社会改革を夢見て，社会思想や哲学を語り合うことで紛らわすことが出来た。その間大学に進学し，新しい交友もできたが，ハイスクール時代の友人たちとの交流は終生続いた。1933年同期の60回同窓会には，終の棲家となったボストンから参加している。

ある友人宅に立ち寄った折，友人の両親はソールには分からないとみてイディシュ語で若い訪問客のことを噂していた。ハンサムだなという父親に，母親は悪魔もまたハンサムだよ，と言い返しているのを聞いたソールは，以後そのことがずっと気にかかっていたという。彼は，自身の内に悪魔的性分がひそむと見られたと感じたのだ。友人の母は，女性特有の勘でこのハンサムな少年がいずれ女を泣かすようになると見抜いたのかも知れない。

Tuley High School の友人グループ（the Tuley crowd）の中でリーダーシップを執ったのは，成績優秀な Isaac Rosenfeld（1918－1956）であった。短パンをはいた13才は，Tuley 哲学クラブの面々を前にニーチェについて印象深い講義をしたという。この早熟な秀才は３才違いのベローよりも先にシカゴ大学を目指した。ベローは，アイザックの後を追うが如くに大学，大学院，そしてニューヨーク進出と同じコースをたどる。アイザックは，ユダヤ教のラビの家庭に育ち，勉学に励むことは当然の環境であったから，ベローにとっては憧れの家庭であったことだろう。

ところで，『この日をつかめ』［*Seize the Day*］（1956）にみられる主人公と父親アドラー博士との間の確執は，アイザックの家庭状況を反映しているのだという。また，前述のアインホーンは，幼馴染サム・フライフェルドの父をモデルにしているとされ，父親になかなか認められなかったわが身を嘆く一方で，他所の家庭でも同様な親子関係があることを洞察して悲観に陥らない精神的強さを習得しつつあったようだ。

1930年代，産業発展の著しい大都市シカゴにあるシカゴ大学は，世界を席

巻する勢いの社会思想の研究拠点「社会思想に関する委員会」（Committee on Social Thought）を設置した。[2] 若きシカゴ市民のベロー世代は，時代思潮の影響を直に受けてリベラル主義を実践し，大学周辺で結婚生活を送りながら互いに刺激し合う知的雰囲気を形成した。ソールの最初の結婚（1938年）は，そのような交流のなかで芽生えた愛―連帯感と言えようか―がもたらした。妻アニタは，クリミアから移民したユダヤ人家庭に育ち，シカゴ郊外のノースウェスタン大学で学ぶ急進的グループで活動していた。彼女は，既に寡婦の母と二人の共に図書館司書として働く姉，弁護士の資格をとろうとしている兄という堅実な家庭の娘である。ソールは，義理の母に亡くなった母を重ねて偲んだに違いない。また，食事に招かれた際自由に世相などを議論する家庭の雰囲気にこれまでにない快適さを感じたことだろう。新婚とは言え，まだ学生であった妻の期末レポートなどを代筆して支えた外，自身も家業の石炭販売業を手伝って家計の足しにした。文芸誌に投稿しながら文筆で身を立てる夢を少しずつ実行に移す一方，講師職を続けて生計を確保していた。穏やかに家庭生活を送っていた反面，思春期に染まった自由を最も愛する思想―家庭持ちに当然求められる貞節とはかけ離れた自由奔放さ―から抜け出ることは難しく，社会福祉関連の仕事をして家計を担い安定を望む妻との意見の食い違いは，次第に明らかになっていった。友人たちは学位を取り，ニューヨーク，カリフォルニア，あるいはヨーロッパでそれぞれ仕事に就いて去っていく。そんな折，街で出会った一人の大学教授に「おや，ロマンス作家殿はいかがかな？」と訊ねられて，今やただ一人の専業作家である自分の状況の異様さを意識するのであった。

3．マルクス・レーニン主義との訣別

1940年，ソールは，友人とメキシコへ旅立つ。モスクワ裁判で敗退したトロツキーは，メキシコに亡命していた。若い信奉者に正統派マルキシズムを教え込んでいたトロツキー本人とひとを介してインタビューの約束をとり，

滞在先を訪れてみると周りは騒然としていた。トロツキーに会いに来た新聞記者と称して中へ通された二人は，その日の朝暗殺され，緊急治療室で血のにじむ包帯にまかれて横たわっているトロツキーの遺骸に直面する。

スターリンの権力がいかに遠くまで及んで，反対勢力を処理することができるのかを目の当たりにして，独裁者の死の命令の前では，非力な個人であることを痛切に意識した。大学時代（1933年），トロツキーを崇敬していたソールと友人たちは，運動に参加し，レーニン主義に忠実にその歴史的教訓を解説し，スターリンの罪を説明することができたが，活動家ではなかった。みな，作家を目指して，大恐慌の不況のなかで職もなく理想に燃えつつ貧しさに耐えていた。ソールは，やがてマルクス主義政治から離れていくことになる。

政治的にはリベラルな個人主義にたどり着く一方，Tuley 連中と自由で文学的事柄も議論し切磋琢磨した知的ライバル意識は，ベローにとって終生大切にすべき純粋な交流であった。

文芸誌 *Partisan Review* に拠点をおくニューヨーク知識人グループに才能を見出されて後は，シカゴとニューヨークを往復する機会が多くなり，ニューヨークでは親友ローゼンフェルド宅に滞在した。1944年に出版した『宙ぶらりんの男』［*Dangling Man*］では，戦争の気運に突き動かされて，軍に参加しようと辞職して徴兵通知を待つ男の心境が日記体で綴られる。主人公は，今や家計の担い手となった妻や，裕福な兄の家でのパーティで高慢ちきな姪といさかいを起こす。友人たちとも思想的に衝突する。孤立し孤独に自ら苦悩を求めていく主人公を作家の筆が救済しようと奮闘している。ロマンス作家殿は，自らの目指す方向を模索する日々であった。

4．最初の結婚

1944年グレゴリー（グレッグ）が誕生する。グレッグ氏の伝記 *Saul Bellow's Heart: A Son's Memoir*（2013）では，長子誕生後しばらくは，平穏な家庭

であったようだが，大学教員では飽き足らない作家は，自らの大志を実現すべくヨーロッパ行きのスカラシップに応募し続けた。数回の挑戦で射止めたグッゲンハイム研究奨学金で家族はパリに滞在し，イタリア，スペインなど各地を旅してまわった。[3] ソールの目的は，かの地の芸術家，作家，詩人たちと交流しながら自身のスタイル，文学性を定めることであった。その結果生まれたのが，*Augie March* で，この作品により前２作とはがらりと作風を変え，アメリカ国民の感性に呼応する溌剌とした文体を編み出した。伝記によれば，本作を執筆中は，モーツアルトのレコードをかけて気分を陽気に高めていたという。

作家修業時代に携わった短期の仕事―WPA Writers Project ならびにシカゴ大学における Great Books of the Western World project―はベローの文学的博識を増大させ，名作古典の理解に大いに寄与した。ヨーロッパの文豪たち―バルザック，ドフトエフスキー，カフカ―に魅了されたベローは，ユダヤ移民の子弟である自身の出自を含むシカゴという狭い空間に拘束されることから距離をおきたいと考えていたのだ。シカゴ救済支援局に勤務する社会福祉士である妻アニタの専門職の地位を積極的にベロー家に主張することで，事業を生業とする家族の伝統からも遠ざかることを試みた。アニタは，作家志望に燃える夫の盾となって保護してくれたのだ。アニタの職務は，貧しい人々に救援小切手を配布することであったが，この事実は，短編“Looking for Mr. Green”（1951）という作品の題材になっている。だが，最初の結婚は，グレッグ８才の時に破綻する。

５．結婚と離婚

1946年ミネソタ大学の英語助教授として赴任し，先輩教授の一人 Robert Penn Warren（1905－1989）とは生涯にわたる交友を結んだ。[4] 注目すべきは，Penn Warren は Cleanth Brooks と共著で，アメリカの大学における文学教育に大いに影響を与えたテキスト『詩の理解』（1938），『小説の理解』

（1943）の著者であったことである。この両書は，1930〜1940年代にかけてアメリカのアカデミズム文学批評を席巻した「新批評」（New Criticism）の教典とも目された。ベローも盛んに各種文芸誌に書評を投稿し掲載されることを繰り返している。実作家修業と同時に相対する立場の批評眼も養っていたのであろう。

1947年最初のヨーロッパ旅行。1948－49年前述のグッゲンハイム研究奨励金を授与されパリに赴く。パリ在住の Tuley 仲間の友人の仲介によりフランスの作家たちと接触。バタイユ，メルロー＝ポンティ，カミュ，ケストラーなどと交流するなかで，サルトル，ボーヴォワール，メルロー＝ポンティらの同人誌『レ・タン・モデルヌ』［*Les Temps Modernes*］は，マルキシズムや左翼政治思想を自身がハイスクール時代に理解しているほど理解していないことが明白となり，フランスの知識人生活に強い嫌悪を募らせる。そんな中で構想・執筆したのが『オーギー・マーチの冒険』であった。従って本作は，シカゴという典型的アメリカを代表する都市の色彩が色濃く出ている，言わば，ホイットマン流のアメリカ宣言の書の様相を呈していると言えよう。1950年ザルツブルグアメリカ文学セミナーで講義したことを皮切りに国内でも各大学での講演を精力的にこなし，ユダヤ移民作家 I. B. シンガーの短編“Gimpel the Fool”をイディッシュ語から英語に翻訳して *Partisan* 誌に紹介する。また，黒人作家ラルフ・エリスン（1914－1994）の作品 *Invisible Man* の書評を *Commentary* 誌に発表するなど他作家の奨励も怠らないという多方面にわたる活躍を開始する。エリスン夫妻とは，終生交流を続けた。ベローは，厳父アブラハムの遺産でハドソン川沿いの地 Tivoli に別荘を購入したが，彼が不在の時にはエリスンがハウスメイトとして留守宅を預かっていたという。別荘での生活の様子は，*Henderson the Rain King*（1959）や *Herzog*（1964）に描かれている。

若手作家として昇り調子の勢いのなか *Partisan* 誌の大学新卒の受付嬢と出会う。父親との確執に悩むこの若い女性に理解を示したことがきっかけとなり，二人は結婚へと進展する。ところが，いわゆる糟糠の妻アニタが承服

しないので，離婚を進めるべくベローは，ネバダ州のリノに一定期間滞在し，離婚手続きを遂行した。その頃ハリウッド女優マリリン・モンローと結婚を進めたい，劇作家アーサー・ミラー（1915－2005：奇しくもベローと同じ生年，没年である）も滞在していた。当時徐々に勢いを増していたユダヤ系作家の台頭を窺わせるエピソードではないだろうか。この時の滞在経験は短編“Leaving the Yellow House”（1958）を生み出している。

このような強引な離婚断行は，後々まで余韻を残し，長男グレッグ氏による伝記 *Saul Bellow's Heart: A Son's Memoir* では父ソールに対して痛烈な身内ならではの批判・非難が散見する。同書では，終始一貫父ベローの性格的弱さに由来する優しさが原因で様々な人間関係にまつわるトラブルを起こしたとみていて，たびたび‘protect’（「保護」）という単語が出てくる。堅実なキャリアであるケースワーカーの妻は，家計とともに繊細な感受性を持つ作家の夫を守る姿勢で家庭を運営していたが，たびたび国内外を旅行するジプシー的生活や次第に名声を博して，知名人たちとの交流が増していく夫に同調し難くなっていったようだ。

グレッグ氏は長じて，シングルマザーの家庭で鍵っ子にならざるを得なかった自らの精神状態を立て直す意味からも精神分析医としてのキャリアを選んだ。そして，妻子を放棄してまで追求した第二の結婚で，若い妻に，しかも不倫相手は友人という形で裏切られる痛手を被った父の話し相手となり，支え続けたのである。別れた後親子は，取り決めにより定期的に会い，よい遊び相手であった。ベローは，父親というよりも友達であったのだ。親子の関係では，*A Silver Dish*（1982）において息子の側の大人の理解による深い和解が得られる結末を提示しているが，息子グレッグとの男同志の会話を通して得られた確信であったかも知れない。しかし，次男 Adam をもうけた第二の結婚は長続きせず，わずか 4 年で終わっている。

次の結婚（1961年）では，当時若い有望作家であったフィリップ・ロスが紹介した，目映いばかりの美しい才媛スーザンが配偶者であった。彼女は，名門ウェズレー大学を出た英語の教師であった。ベストセラー作家として世

評も確立していたベローに近づいて行ったスーザンに，先の結婚で痛く傷ついていた40才半ばのベローは恋に落ちてしまった。1962年には念願の故郷のシカゴ大学へ赴任する。1964年三男ダニエルが誕生し，順調にいくかのようにみえた。スーザンは元々ニューヨーク生活を好み，裕福な家庭に育ったためか尋常でない浪費癖でセレブな生活を送りたいのに対し，ベローは作家という職業に飽くまで真摯に取り組む―朝９時30分から午後２時までは執筆に没頭する―というライフスタイル上のギャップがベローに違和感を増幅させていった。

グレッグ氏の回想では，散歩中に父ベローからグレッグの母アニタと離婚すべきではなかったという告白を聞いて仰天する話が出てくる。成人した息子は，作家としての人生展開では起こるべくして起こったという成熟した見解を示しているが，ここに至るまでにどれほどの葛藤があったことであろうか。グレッグ氏は，ベロー家の主婦が変わっても父の家を訪問し，幼いながらも新しい義母を観察し，子どもの目線で純粋にみている。そして，父が離婚するほどの酷い，悪い女性には見えないと感じていた。

そこから，専門職の識見を用いて（児童）精神療法医として，度重なる結婚・離婚を繰り返してその結果ますます紛糾する事態を招く父のより良い相談相手になるという決断が生まれたようだ。ベローは，息子の職業をあまり好んでいなかったようで，それは恐らく自身にも不可解な心の底，闇を見透かされることを危惧したからであろう。

ベローが新たに結婚を決意するときは，多分ロマンチックな高揚した気分の勢いがあったであろう。[5] 伝記作家 Atlas の解析は全般に冷静な視点で終始している。彼は，子供の誕生により，ベロー自身はもはや子供ではなくなり，その立場を自分の子供に取って代わられるのだと解釈する。従って，子供の誕生はベローがその家庭を離れる時なのだと断言する。[6]

しかし，現実の生活は，夫，父親としての役割も要求してくる。グレッグ氏は，家庭生活において冷淡な側面をみせる父を指摘しているが，『書簡集』のなかでは週末に父親の下に送り込まれた幼い子の朝食の準備，着替えなど

まめまめしく世話をしている様子もみられるから，一方的に冷たい親とは決められないように思われる。成長して話相手ができるようになると，腹を割って相談に乗ってやるなどしている。グレッグ氏には次作の構想を話してきかせたという。

6．繰り返される失敗

子ども時代から，父と遊び，散歩しながら会話を重ねるなかで，父の自ら招いている風な難儀をひたすらこなしていく姿は，同じく大人になった長子から見ると完全に被虐的に映ったであろうが，そうなる前に回避できなかったものだろうかという疑問が生じる。グレッグ氏の解析もまじえて考察してみたい。

まず，最初の離婚をリノに出向いてまで実行したのは若気の至りであったろう。人気の出始めた作家には，何でも可能な気分になっていただろうし，父親との近親相姦的軋轢に悩む若い女性を救ってやろうという父性も働いたであろう。だが，事はそれほど易しくはなかった。次作の執筆もあり，大学の教職をこなさねばならない。別荘での不便な日常生活に加えて育児に苦労している妻にたいするケアがつい手薄になった。その隙につけこんで，人気作家を取り巻きつつその何かを真似し盗もうとしていた友人が，妻を掠めていたのだ。実際のベローは，この事実になかなか気付かなかったようだが，その後の対応については話題作 *Herzog*（1964）に詳しい。

ここで，ベローは作家としての本分を発揮する。妻を寝とられた屈辱を乗り越える過程を，主人公が多様な西欧文化の知識を活用して自力で或る諦観の境地にたどり着くまでに至る意識の変遷を，書簡体を駆使して緩急自在に描く。あたかもそれは自己救済であるかのように，筆力を尽くすのである。自分と妻と友人から成る三角関係の埒外に放り出されて一挙に孤独の深淵に突き落とされた中年の知識人。彼に考えられる限りの報復は，自己の持てる知識を援用して現況を客観的に分析することであった。彼自身の生き方が誘

因であることも理解して，このような茶番劇に付き合わされるのはお断りだ，と決断する。

実際にあった事柄を基に，大学教員という立場に拘束されるなか作家は見事に独特の解決法を編み出したのだが，第三者の立場にあるグレッグ氏は，三者三様に公平な見方をしていて，小説発表後の当該関係者は苦渋のその後を送ったと言及している。当時赤子であった次男 Adam 氏は，名門プリンストンを卒業後編集者の職に従事しているが，メディアに発表している写真の姿は，兄弟中最も父ソール・ベローに似ているようだ。彼の発する父親に対する皮肉に満ちた言説を長兄グレッグ氏がやんわりたしなめたとある。そこには，憎しみのうちに別れた母の影響もあろうが父親との生活は短く，その愛情に直にふれる―長男グレッグの場合と同様，離婚後は定期的に親子面会がなされてはいた―交流が少なかったという悲しい事実が読み取れる。

繰り返す結婚の不調は，ひとつにはベローの側にその要因があるようだ。母親に甘やかされて育った末っ子は，母の人の心を理解し，共感を呼び，夫アブラハムの癇癪を和らげる能力を尊敬していた。母のように保護してくれる深い母性愛を女性に求めたのだ。だが，結婚による安定を望む一方で，身辺に近付く異性との付き合いに糸目をつけなかったというから，甚だ身勝手な夫ではある。実際，ダンディな若手の大学教員として，特に女子学生に人気があり，彼女たちは家庭持ちであると承知しながらベローに接近してきたという。

グレッグ氏の分析では，親友アイザックとベローは，若い時分のマルキシズムに影響されて，貞節はブルジョワのイデオロギーと信じていたとある。また，アイザックの先導で，（性的）エネルギーの全人格的解放を提唱するライヒ（1897－1957）の自我心理学に心酔し実践したことも関係すると思われる。早熟な秀才と思春期に母を亡くした母親っ子は，人生の一時期若いエネルギーをこのような形で発散した。その報いは，アイザックの離婚後の孤独な早世であり，ベローのうち続く破婚となって現れたのである。

生来のお人好しで女好きと言ってしまえば，片がつくものの，恐らく作家

魂なるものが好奇心をフルに発揮して，貪欲に人間観察をさせていたのではないだろうか。人間観察の対象は，異性に限らない。幼少時のユダヤ人居住地区に住む数々のユニークな人々，ハイスクール時代の友人たち，ニューヨークに進出して成功を夢見る駆け出しの作家仲間，大学の同僚教員，教え子等々多岐にわたる。また，これらの交遊関係は広く長く続いている。

従って，人物造型の素材には事欠かなかったのである。但し，このロマンス作家殿は，男女のロマンスとなると，甘美な愛を全うするような物語は書けていない。その前に破綻し修羅場を来してしまうのだ。代わりに，そういう結果になった過程を執拗に考察して，自身の解決を見出す。ここに，筆者を含めて読者は魅了されるのであろう。読者は，登場人物や彼らを創造した作者に個人的な意味を吹き込み続けるにあたり，作者ベローに形をなした不朽の名声をもたらすのである。グレッグ氏は，この形こそ父ベローが最も喜ぶものであろうと確信している。

しかし，一見被虐的な—ユダヤ系作家の研究者の言を借りれば，常に失敗するシュレミールタイプだ—視点ではあるが，これら明察な考察の対象とされた敵役は，言わば，骨の髄までしゃぶられてしまうわけで，終の勝利者は結局主人公，即ち，彼に託した作家自身なのである。この意味では，決して若き頃の保護を必要とする軟な人間などでは既にない。

若い時分作家志望を認められずに，ビジネス志向の父親から殴られ，二番目の若い妻には自身の友人と共謀して裏切られ，三番目の美しい妻には散々浪費された揚句，ノーベル文学賞の賞金の大半を訴訟により奪われ，四番目の大学教授（数学）の妻には十分に家事をしてもらえなかったという人生経歴のなかで，ベローは鍛えられて強靭な精神を育んでいったのである。70を過ぎて出会った五番目の若い妻ジャニスは，幸いなことに現代女性には珍しく献身的でかつ賢明な昔ながらのユダヤ人女性のタイプであったから，ようやく母親を彷彿とする妻に守られて晩年は穏やかな幸せな日々を送ったという。さらに，世間を驚かせたことに，齢84才にして女の子の父親になったのである。最後まで世間の思惑に逆らってわが道を貫いた人生であった。長命

であったベローは，兄弟，友人たちを見送ることのほうが多く，その都度悲しみに暮れていた。晩年心臓が弱り発作を起こすなど衰弱して90才を目前にした４月５日息を引き取った。

波瀾万丈の人生であったが，ある意味自ら求めていった人生であったろうから，本人は十分生き切った思いがあり，満足した生涯であったに違いない。また，Atlas は，ベロー自身は自らの生き方について徳行の模範では決してないことを承知していた，とみている。その都度付き合わされた人間，特に女性たちも，そう考えると面白い体験になったのではないだろうか。三人の息子たちも，それぞれ大人になった今，偉大なる父親を誇りに思い，この父を共有する連帯意識，強い絆で結ばれているという。父ベローは，子どもたちの心の中に永遠に生き続けている。

７．ベローの作家的姿勢

既述したように，ベローの作品の大半は，自身の体験のほか自己の身辺で起きた出来事を題材にして，自身の関わりの程度もしくは好き嫌いの尺度に基づいて美化またはデフォルメの方向に物語化する。側近の立場，即ち，コンフィダント（秘密の打明けの相手）といえる長子グレッグ氏には，自分本位な価値判断で全てをコントロールしていると思えるのだ。特に，性的行動を釈明・正当化するために父はうまく論理的根拠を構築できるとみるわけだが，一個人としての，父親としての人間性を批判することは，個人的な家庭の問題であって，数々の話題作，傑作を生み出した芸術家としての作家を正当に批判しているのではない。*Herzog* や“A Silver Dish”に描かれている親子関係では息子の側の大人の理解で，父の一見勝手な生き方が止揚され称賛されるに至る。グレッグ氏は，これらの作品を通して父の我がままで失敗続きの生き方に同情あるいは非難することは，父と息子両者を壊滅させることになると理解したのである。

グレッグ氏は，著書の後半に至って批判に変容を来していると言える。80

才を過ぎて体力・知力に衰えのみえる父は，息子たちの意見を傾聴するようになった。勿論，有能な秘書でもある妻ジャニスの手厚い介護もあるからだ。そして，グレッグ氏は，理解したのだ：作家は，人間の生の可能性を追求するにあたって，自己の知る限りの事柄を題材にして身を削るがごとくに分析・抽出していく。他人の個人情報を巧みに利用している半面，自身の本心を吐露していくのだから，そこに強靭な精神力が発揮されている，と。

普通の家庭人としては問題の多い父親を，精神分析を用いて切り刻む行為により，ひたすら責めて文学を弁えない並みの人間である自分に気付いたとき，今までの批判は影をひそめる。グレッグ氏は，父の回想記を書き留めることによって創作という唯一の目的のために生涯を捧げた偉大なる人間の足跡をたどった。そして，高名な作家ソール・ベローの一般の認知に影響力を持ち続ける，文学的英雄としての父の社会的地位に敬意を表して脱帽せざるを得ない。ここに，グレッグ氏は，文学に一生を捧げ切った父ベローの姿に，勇敢なる英雄を見たのである。

精神分析医となった実の息子でさえ理解に苦しむ父親の実体であったが，作品を創作するために家族も犠牲にしかねない真剣な姿勢を目の辺りにして，息子の一個人の不満はかき消された。ベローが追究して止まないことは，内なる道徳規範を失なったが故にその導きを得られない現代人を憂えて，自らの人生を基にして抽出した人智を伝えることであったのではないだろうか。

注

1　James Atlas, *Bellow: A Biography* (New York: Random House, 2000)
　Benjamin Taylor ed., *Saul Bellow: Letters* (New York: Viking, 2010)
　Greg Bellow, *Saul Bellow's Heart: A Son's Memoir* (New York: Bloomsbury, 2013)

2　1962年ベローは，同委員会に教授として赴任している。これを機に故郷シカゴでの安定した結婚生活が期待された。

3　1949年パリ留学中に，ザルツブルグのシロス・レオポルドスクロン城を会場とするア

メリカ文学セミナーの講師を依頼された。1947年から毎年開催されている同セミナーに1952年１月福田陸太郎氏は参加している。その時の印象は，『グリーン氏探索他２篇』（1960，開文社）のはしがきに詳しい。講師の一人のベローについて，若々しくダンディな風采で，まだ『オーギー・マーチの冒険』が出版されていないが，才能は相当世に認められていたと言っていいと記している。その約一カ月間の講義の内容は，アメリカ文学の古典から現代にいたる作家と作品など網羅的かつ内容の濃いものであったことが窺える。

4　ロバート・ペン・ウォーレンは，バンダビルド大学在学中に，南部農本主義文学運動の拠点である雑誌 *The Fugitive* に投稿し，John Crowe Ransom らとともに活躍。同誌は，刊行期間は３年余りと短命ではあったが，詩人 Allen Tate なども育っていった「新批評」の温床となった詩誌。ウォーレンは，詩人としては形而上詩の伝統に立ち，ピューリッツァー賞３回受賞している。1986年米国で初めての桂冠詩人に選ばれる。

5　グレッグ氏によると，作品が完成すると同時に新たなロマンスが始まっていたという。

6　Atlas は，くり返される結婚，離婚は作家にとって将来の作品に豊富な材料を提供したとみる。